

女体化魔王と 子作り

しちゃいませんか？

089タロー

挿絵／奈々篠カ劇

試し読み版



登場人物紹介

Characters



まおう
**魔王メル＝
ディアヴォルス**

傲岸不遜で好戦的な魔王。美しい容姿に反して色恋沙汰に興味がなくエッチなことにも疎い。気が強く口も悪いが褒められると照れてしまうピュアな一面もある。

ゆうしゃ

勇者ルーイ

人間離れた戦闘力を持つ勇者の少年。性格は軽くてスケベだが妙なところで真面目。世界を平和にすれば極上の美女を嫁にもえれると思って魔王討伐の旅に出た。

せいけん

聖剣エスペラル

使い手の願望を力にする聖なる剣。古代の刀匠が時の魔王を滅ぼすために打ったとされている。意思がありしゃべる。

序章	勇者と魔王の決戦、そして――	006
一章	美少女になった魔王	017
二章	美少女魔王とのドキドキ二人旅	048
三章	魔王と勇者の初夜は青姦で	079
四章	どスケベ勇者との破廉恥道中	109
五章	魔王と船旅と無人島と	146
六章	スケベ勇者と変わりゆく魔王	174
七章	魔王と花嫁と子作りエッチと	196
終章	新たな旅立ち、そして新たな魔王との因果――	243

二章 美少女魔王とのドキドキ二人旅

「……ん、んうう……」

窓から差しこむ朝日が照らす、簡素なベッドが一つある。

古ぼけた狭い寝台の上で、美しい少女は身動きしながら目を覚ました。

「ここは……あれ、俺のベッドじゃない。狭いし硬いし綺麗じゃない……」

寝ぼけ眼で辺りを見渡すと、そこは板張りの小さな部屋。ベッドのほかには椅子しかない質素にすぎる空間だった。

「ん、ん、ふぁ……ああよく寝た」

と、不意に脇から声が出た。少女の視線がついと見て止まる。

「……………な、なな、ななななにやってるんだお前はあああっ!!」

すぐ隣で寝ていた少年は彼女を仰天し罵声を飛ばす。

「おお、もう起きてたのか。っていうか声でかいぞ。朝なんだから静かにしろって」

「知るかそんなの! そんなことより、なんで一緒に寝てるんだあっ!!」

「ん、ああ。いやな、こっつて随分な田舎だから宿屋も一部屋しかなくてさ」

その少年、ルーイは悪びれもせずそう言った。

「だからって同衾どうきんはないだろう!」

「同衾って、いやあ照れるなあ、可愛い女の子にそういつてもらえるなんて」

「脳ミソ沸いてるのか!! 誰が女の子だ誰が——って、あ……」

身を乗り出した美少女は、拍子に揺れた自らの胸の存在に気づく。

「そうだった、俺、勇者と戦って女にされたんだ……」

見事に膨らんだ乳房を掴んで美少女魔王は嘆息する。

とそこで、今頃気づいて目を丸くした。

「って、なんでむき出しなんだ!! 鎧が脱げてる!!」

シヨートパンツを穿いてはいたが、ほかは全部脱がされ裸同然の格好だった。

「そりゃ鎧着たまま寝かせるわけないだろ。野宿じゃないんだから」

彼女の揺れるおっぱいを眺めて、ルーイは鼻の下を伸ばす。

「身体に合ってなかったしな。感謝しろよ、身体だってちゃんと拭いてやったんだから」

「ふざけるな馬鹿やろおっ!! どこだ、俺の鎧をどこへやった!!」

「売っちゃったよ。身に着けられないの持ってたっしょうがないだろ」

「ぶ——っ!! ななな、なんてことするんだお前はああっ!!」

「まあ宿代くらいにはなったな。呪われてるから大した金にならなかつたけど」

「だ、代々伝わる魔王の鎧が宿代なんか……鬼か? お前は鬼かああっ!!」

頭を抱えベッドにうづくまる美少女魔王。

「ご先祖になんていえばいいんだ……そうだ思い出したぞ、昨日も信じられないことした



な！ 最悪だ、男に触られて、あ、あんなのかけられて……このど変態、鬼、悪魔、外道！」
「魔王にそこまでいわれる俺って……まあ落ち着けよ、ここがどこだか分かったんだしさ」
おっぱいが隠れたのを残念に思いつつ、ルーイは話し始めた。

二人が今いるのはソルテル大陸の西端だった。山々を有する辺境で海に近い。魔王城からかなり遠く、相当な距離を飛ばされたと知れた。

「魔法なのか爆発の余波か、原因は分からないけどな。とにかくすごい田舎だ。魔王不在の話だっついで最近やっと来たらしい」

「最近って、あれからどれくらい経ってるんだ？」

「十日だっついで。昨日森にいたんだから九日間、誰にも目撃されなかったってことだな」
つまりそれだけの間、行方不明になっていたというのだ。

魔王も勇者も行方知れず。そんな話はすぐ大陸中に広がる。きっと人間も魔族も魔物も、誰も彼もが捜している状況だろう。

「けどまあ、魔王様は今じゃ綺麗な美人だもんな。せつかく見つけた魔物たちだって結局分からなかったしな、ははは」

「はははじゃない！ とつとと元に戻せ！」

シートからガバツと顔をあげた魔王は、涙目になっていた。

「泣くことないだろ、そんなに女の子がいやなのか？」

「鎧を売られたのがショックなだけだっ！ 大体泣いてなんかいないから早く戻せ！」

「そうはいってもな……エスペラルがその有様じゃな」

ルーイは魔王の豊満なおっぱいの谷間を見る。そこには聖剣の柄頭がアクセサリーのよ
うに浮き出ていた。

「ほとんど埋まっちゃってるもんな。引っこ抜けていっても無理な相談だぜ。エスペラ
ールだって一体化してるっていつてたしな」

刀身が突き出ていないことから間違いないと考えられる。魔法的な融合ならば普通の
方法では分離は不可能だ。

「じゃ俺は、ずっとこのままってことか？ ふざけるな、全部お前のせいだぞ！ 責任
取れ責任を！」

「責任って、なかなか積極的だなお前。よし、俺も男だ、責任取ってきちんと結婚を」

「だああちがああうっ!! 男同士で気持ち悪い話するなああっ!!」

ルーイの首を絞め美少女魔王は涙目で睨んだ。

「昨日もあんなことして、ただで済むと思ってるのか!? いいか、殺さないでいてやるの
は元に戻りたいからで、男に戻ったら速攻お前をぶちのめしてやるからな!!」

「く、苦しいって、落ち着いたら」

「お前のせいだお前のおおっ！」

「でもさ、そんな暴れるとほら、おっぱいが揺れまくって……へへ」

がつくんがつくん揺すっていたため、豊満なおっぱいがたっぷんたっぷん揺れていた。

「な、ななっ、なに見てるんだ馬鹿やろおおっ!!」

「いてえっ! いいじゃないか、男なんだろ?」

「都合のいいときだけ男っていうなああっ!!」

『まったく、本気で騒がしいですよ二人とも』

不意に魔王の胸元から、涼やかな声が聞こえた。

「エスペラール? 起きてたのか、黙ってるから寝てるのかと思った」

『うるさすぎて寝てられません。子供ですかあなたたちは』

うんざりした声音で言ってから、魔王の中の聖剣は、少し真面目に話しました。

『魔王も落ち着きなさい。——恐らく元に戻る方法があります』

「本当か? じゃあ教えろ、すぐだすぐ!」

『はいはい。——恐らくですが、魔王城でならば分離が可能かと』

「どういうことだ?」

『あそこは魔力の集う場所。魔の力が強化されるため、あなた本来の復元力が勝るかもと』
いわく、変化というのは本来不自然なものだという。不自然な力は自然な力に劣り、自然力が強くなれば撥ね除けることもあると聖剣は語った。

だがそれにはルイーの存在も不可欠だという。最終的には彼が引き抜くほかないそうだ。
「つまり魔王城まで一緒に行くしかないわけか。いやあ、魔王と旅とか勇者って大変だな」
「こっちの台詞だ! 魔王である俺が勇者と旅なんて冗談じゃない」

魔王は腕組みし不快げに言った。が、さすがに背に腹は代えられないらしく、

「くそ、頭に來るがやむをえないか、このままなんて絶対いやだし……まあいい、城でならすぐ決着もつけられる。じゃあ早く連れていけ。いいか、大急ぎでだ」

「あのな、簡単にいうなよ。かなり遠いんだぞ。それに偉大な魔王様ならばびゅーんって飛んでつたりできないのか？」

「う、で、できるとも！ ただ、なんだ、ちよつとだけ調子が悪いというか……」

ルーイの質問に魔王はモゴモゴと口籠くちごもった。

「……はあ、強がるなつて。できないんなら素直にそういえよ」

「違うできる！ でも、えつと、魔王たる俺が自ら飛ぶ必要などないし、普段はドラゴンに乗ればいいから……」

「やっぱできないんじゃないか」

「ちち違う、練習すればきつとできるようになる！ 聞いて驚け、俺ほどになればいつかテレポートなんかも容易たやすくでき——あ、信じてないな、笑うなこいつうっ！」

また涙目になって魔王は首を絞めてくる。

なんとというか、感情がすぐ顔に出る子だ。意地っ張りな性格でもある。おまけに女体化の影響なのか、羞恥や悔しさを感じたりすると無意識に涙目になるらしい。

（可愛い奴だなあ。単純でちよつと面白いし、構い甲斐のある奴だな）

そんな風に思いながら、ルーイは笑って首を絞められ続けた。

第三章 魔王と勇者の初夜は青姦で

魔王ディアヴォルス——メルは、派手に転倒した勇者ルーイを見た。

(なに考えてるんだこいつ、いいいきなりっ、キスしやがるなんて!?)

野宿したのは覚えている。街道を少し離れ柔らかい土の上で寝たのだ。夜になって少々冷えたが焚き火のおかげで暖かく眠れた。

だが、この現状は理解不能だった。目覚めるとなぜだか勇者にキスされていたのだから。(まさか、寝てる間に俺に何か飲ませようとしたとか? だから口移しとか)

毒薬だったら大変だと慌てて唇を拭う。

「いてて……突き飛ばすことないだろ。そんな唇拭わなくったって」

派手に飛ばされたはずなのにルーイは平気そうだった。それどころか、こちらの身体を欲望丸出しの目で見ている。

「なに見てるんだ、気持ち悪——って、ななな、なんで脱げてるんだああっ!」

見ると胸当てが外されていた。自分はやっていない。宿ではないため鎧姿のまま眠ったはずだ。なのに乳房が露出していて先端がピンと尖っていた。

しかも身体が妙に気だるくふわふわしている。下腹部に不可思議な熱が溜まって浮ついたような感覚があり、全身に力が入らないばかりか動くことさえ億劫おっくうに思えた。



おかげで上手く立つことができない。ルーイの接近に構えることができない。

「悪い、今のメル見るとどうしても……さ。なんせ最高に好みなんで」

「な、なにが好みだ、俺は男だぞ！」

「いや女の子だよ。だってさ……すごく感じてイってくれたじゃん」

そう言って彼は両肩に手を置いてきた。なぜだかドキツとしてメルは緊張する。

「か、感じたって、どういう……」

「たとえばことか」

「ひゃうっ！」

——きゅっ、きゅきゅっ。

乳首が二つとも指に摘まれ引っ張られた。思わず声が漏れ、肩がびくつと跳ねあがる。

「なっ、なにをするお前、そんなとこ摘んで、んあっ、あっ、あっ、あっ……！」

なおも小刻みに引っ張られると乳首の芯がじんじんと痺れた。たちまち広がる奇妙な感覚に声が勝手に湿ってくる。

（どうしてだ、乳首、変になるう……力、抜けちゃう……）

突き飛ばそうと思っているのに座りこんだままできないでいる。奇妙な感覚は乳首を中心にどんだん広がり、邪魔で仕方ない豊満な乳房を快い電流で覆っていく。

「はあ、くひいつ、なにをした勇者、寝てる間に、くふうっ、俺にないを……」

「こういうことだよ。乳首しごいたりこうやって吸ったり」

「やめるこらあ、ひゃううんっ!? ほ、ほんとに、吸うなあっ！」

彼は乳首にぷちゆりと吸いつき乳輪まで口に含んできた。そのままちゆるちゆると啜りあげられ舌の先で舐め回される。

(なんだ、これっ、こっちも変になるう……吸われると、舐められると、おっぱいの芯が溶けてくみたいにい……!)

以前感じたものと同じ種類の感覚だった。そう、森で勇者に嬲られたときの、あの不可解な甘い熱の感覚に。

あのときはひたすら混乱した。未知の感覚器官が突然目覚め始めたようで、自分の身体ではないみたいだった。

だが今感じているのは、あれよりもっと鮮明なものだ。どこか心地よい快電流が乳房を通じて脳にまで達し、浮遊感を伴うような不可思議な愉悅を生み出していくのだ。

(どうして、身体、熱くなるう……座ってることも、できなく……)

急に熱くなったというよりは渦巻く熱が再燃したという感じ。目覚めたときから汗ばんでいた肌に新たな汗珠がぷつぷつと浮いてくる。

メルは悟る。寝ている間に自分は身体を熱くされたのだ。

「はあ、はあ、お、お前っ、よくもこんなあ……!」

精一杯睨みつけるも、愉悅に脱力し、そっと仰向けに押し倒されてしまう。

拍子に揺れた二つのおっぱいを、ルーイの両手がぐいと掴む。

「あつ！　こら揉むなあ、あつ、あつ、んあつ、んああ……！！」

「気持ちいい、メルのおっぱいほんと柔らかい……大きいから同時に乳首吸えちゃう」

「ひあ馬鹿やろうっ、同時にとか、んひゃあんっ！」

今度は揉みながら突起を二つとも啜えられた。真ん中に寄せてちゅるちゅる吸り、時折唇で摘んで引つ張る。

これがまた不思議に快くて、メルは堪らず身をくねらせた。

「やめろお、んあつ、あんっ！　くそお、離せよ、離せえっ……！！」

そうは言うものの浮遊感が増すばかりで、乳房を走る快電流が神経を甘く溶かしていく。押し退けたいと思っているのに欲しがるように乳輪まで膨らみ、その乳輪すらも舐め吸われると愉悅に腰がヒクヒクと痙攣し始める。

情けない。恥ずかしい。そうは思うも反応は止まらず、進んで貪ろうとするかのごとく神経が勝手に愉悅を拾う。

「はあ、はあ、やめろお、胸、胸ええ……！！」

「メル……おっぱい、敏感なんだな。いや全部かな。こっちもこんなにびしょ濡れにして」
ルーイは乳房から唇を離すと、下にずれて今度は下半身を覗きこんできた。

メルも意識して目をやると、際どく食いこむ細い股布がぐっしよりと湿っていた。

「どうして、まるでお漏らしみたいに……」

羞恥を覚え反射的に隠そうとするが、甘い感覚が邪魔をして上手く手が動かない。神経

の末端まで本当に溶かされてしまったかのようだ。

代わりにルーイの両手が伸び、力の入らない太腿をそつと左右に開かせる。

「ああやめろお、見るな、見るなああ……」

「さつきより濡れてるな。指でイカせたのもあるけど、エッチな蜜でいっぱいだ」
聞いてメルは頬を熱くした。この男は寝ている間にそんなことをしたのかと。

だが彼は、それだけで済ませる気はないようだった。

「いい？」と小さく質問すると、返事を聞かぬまま、くいつと股布を横にずらす。

「やめろお、ちよつ、直接見るなつ、そんなとこ、ああっ！」

止めようとしたがどうにもならない。美少女魔王の初物ヴァギナは少年勇者の目に触れることとなった。

「おおお、綺麗だ。おま○こつて、メルのおま○こつて、こんな風なんだ……！」

白い恥丘に走る溝が、蜜を溢れさせキラリと光る。

それは薄い桃色をした初々しい淫唇だった。小柄な身体に見合うように小振りでぴつたりと閉じあわさり、ほんのわずかに覗いた淫核が恥ずかしげに震えて勃起していた。

未処理だったが不思議と淫毛は生えていない。そのため割れ目は完全にむき出しで、勇者からの熱い視姦を余すところなく受けてしまった。

「俺、見るの初めてなんだ。いつか子作りするときに思ってたけど……最高だ、超どきどきするっ！」

「やめる見るなあ、馬鹿やろう、変態いつ！」

羞恥と悔しさでメルは知らず涙目になった。女に変えられ一緒に旅をし恥ずかしい部分をまじまじと見られる、これほど情けない思いをするなんて一体誰が想像できただろう。しかもなぜだか、ただ見られているだけなのに心臓がばくばくとうるさくなる。頬がさらなる熱を持って赤くなっていくのが分かる。

（見られてる、こいつに、男にっ——恥ずかしい、逃げ出したいくらいだっ……!）

堪らなくなつて無意識に顔を背けてしまう。そんな自分が余計に情けなくて仕方ない。だが羞恥はそれで終わらなかつた。覗きこむルーイの顔が触れるほど寄つてきたのだ。

「なんだこれ、においまで甘い。熟成したハチミツとか芳醇なワインみたいな……ああやばい舐めたい、舐めるぞメルっ、ちゆるるるっ！」

「ひいなにするんだっ、だめっ、くひいひいんっ！」

——ぴちゃっ、ぴちゃっ、ぴちゃっ、ぴちゃっ。

彼の舌が長く伸びて蜜まみれの淫唇を舐めこんでいく。想像もしなかつた卑猥な感触が初心な粘膜を繰り返し襲う。

メルは無論、慌てて足を閉じようとした。乳房もそうだが、陰部を、それも男に舐められるなんて、恥ずかしすぎて洒落しゃれにならない。

しかし彼の逞しい両手が太腿をがっちり押さえこんでくる。

「くひい放せ、やめるこのお、あんっ！　こんな、こんなのおおッ……!」

知らず両手が下に伸びて彼の頭を掴んでいた。けれど突き放す力はなくびくびくと痙攣するばかり。足も彼に屈服したように開いたままカクカクと震えていた。

(だめえ、これ、すごい痺れるうッ……舌ざらざらして、ぬるぬるして、すごいッ……！) 頭の芯まで痺れてくるような甘い快電流が下腹部を覆う。

そう、快感だった。敏感な粘膜で感じる舌は独特のザラつきが刺激的で、腰の感覚が消えてしまいそんな強い官能を絶えず受け取る。認めたくないがそれが事実でぬめりにさえ甘美感を覚えていた。

その愉悦を表すように、舐められるたび粘膜がヒクつき新鮮な蜜を次々と溢れさせる。「びちゃっぴちゃっぴちゃっぴちゃっ——はあ、美味い。甘ったるくて舌に絡む。これがおま○この、いやメルの味か……！」

一心不乱に舐め回しながらルーイは興奮の面持ちで言う。

「見るよ、まだまだ濡れてくる。舌がふやけちまうくらいだ。でも最高、一生飲んでたい」
「馬鹿っ、やろおお、はあはあ、そんなことされたら、俺、くひいんッ！」

口でさえ反抗できないくらい感じさせられてしまっていた。それほど受け取る愉悦は強く、腰の感覚を蕩けさせる。

(お、女って、こんなに気持ちよくなっちゃうのか？ おま○こ舐められるだけで、なんにもできなくなっちゃうくらいっ……！)

すでに全身汗みずくで焚き火の明かりで光って見える。特に太腿とヴァギナの辺りは失

禁もかくやの大洪水だ。腰は自然と動いてしまつて進んで愉悦を貪るみたいだった。

そんな自分を意識して恥じらうも、荒波のごとくやつてくる快樂がそれすら押し流そうとしている。脳と背筋が間断なく痺れ、下腹がカッカと熱く甘く燃え盛る。

「ひいん、くひい、あんやめろお、だめえ、ああうんッ！」

声も格段に高くなつて女らしくなつてくる。元々高めのソプラノボイスに艶かしい音色が交じつていく。

「ちゅくちゅくつ——はあ、メル、すごい可愛い声だ……」

と、不意にルイーは舐めるのをやめて顔をあげた。

「喘いでる顔もマジで可愛い。一生見てたいくらいだ。もう世界最高かも」

「はあはあ、な、なにを……！」

「俺、こんなにときめいたの初めてだ。本気で一生傍に置きたいって思うくらい」

「ばっ——馬鹿、やろ……お……！！」

いきなり真剣な表情で言われてメルはなぜだかドキッとしてしまった。

（一生傍について、そんな——冗談じゃない、俺は魔王でこいつは勇者だぞ、あり得ない——けど、けど……！！）

心音がどんだんうるさくなくて、ほかに何も聞こえなくなつてくる。どうしてか、目の前のスケベ勇者が少しだけ格好よく見えてくる。

（なんなんだこの気持ち、自分でもよく分からない……！！）

「はあッはあッ、んあだめえもう、もうッ！ 飛んじやう、俺もう飛んじやうッ！」
気づけば腰が上下に跳ねて彼に押しつけるみたいになっていた。背筋はのたうちくびれが振れ、目の奥が霞みまぶたが落ちてくる。

愉悅の荒波は、もうすぐそこまで押し寄せてきていて、今にも頂点を突き抜けそう。
そこへルーイが最後のダメ押しをしてきた。

「メル、じゆるるっ、ほんと可愛い、おま〇こも可愛いっ！」

「はあッはひッ、うるさいい、可愛いっていうなあッ、ひッ——ふあああああッ！」

一際甲高い嬌声をあげて、メルは背筋を弓なりにした。

ルーイの鼻が、敏感なクリトリスをプッシュしてくすぐったのだ。そのうえで粘膜を舌先で鋭く引つかいていた。

「ふああだめえくるッ、くるうううッ!!」

貫くような快感が走り、メルは堪らずびくびくと痙攣する。

そして一拍の後、透明な蜜をヴァギナから噴出した。

「ふああ出るうッ！ あひッあひいいッ！」

ぷしゃっ、とまっ直ぐ飛んだ体液はルーイの顔に当たって飛び散った。その様子はまるで失禁で、黄金色だったなら誰もがそう思うだろう。

(すっ、すごい、女って、女の身体って、こんなに感じるなんてええっ！)

メルは星空を見上げながら恍惚の表情で身震いした。

世界が一変したような気がした。これまでまったく知らなかった女体特有の快楽を知ったのだ。何もかも忘れるほど強い愉悅に引きずりこまれていくような気すらした。

しかも余韻も相当なもので、頂に達したのにも、まだその付近を漂っている感じがする。感度も完全にあがりきって、ともすればすぐにもまた到達できそうだ。

(女って……女の身体って、気持ちいい……)

未体験の強烈なエクスタシーに、メルはなおもヒクヒクと打ち震える。

だが、そんな彼女には、さらなる鮮烈な体験が待っていた。

「メル、すごいイキっぷりっ……エッチだ、色っぽい、俺もう堪んないっ!」

「はあ、はあ、え——うあっ!?!」

硬くそそり立つ肉の棒が、濡れたヴァギナにくちゆりと触れてきた。

潤んだ瞳でそちらを見ると、ズボンをも脱ぎ捨てた宿敵勇者が裸の腰を寄せてきている。

「はあ、はあ、ま、まさか、お前……そんな、おいしい……!?!」

*

「メル、俺もう——入れたくなっちゃった!」

興奮に鼻息を荒くしながら、ルーイはメルに覆い被さった。

目の前の彼女、美少女魔王はびつくりした様子で震えている。ヴァギナにペニスをこすりつけられて、ひどく狼狽している。

強引に迫っているように見えるだろう。違うとも言い切れない。

けれど、もう我慢など無理だった。美少女魔王の艶かしい姿に今や心底夢中だった。

「なあ、こ、子作り、していいか？　っていうかしたい、すぐくしたい！」

「はあ、はあ、お前っ、なにいつて……!!？」

「もう限界なんだ、子作りしたくてチンポはち切れちゃいそうだっ！」

亀頭でちゆくちゆくと割れ目をなぞるとメルは可愛らしい鳴き声をあげた。むき出しのおっぱいがぷるんと揺れて淫唇がきゅん、とわななく。

「ひゃうっ！　はあはあ、こ、子作りつて、いきなりそんなっ……!!！」

半裸となった豊満な肢体が怯えたように身動きする。濡れて揺れる美しい眼差しが牡の劣情を甘くくすぐる。

「分かってるのか、俺は男なんだぞ、男同士で、なんて……!!！」

「分かってるけどどうでもよくなっちゃった。メルみたいな美人でエッチな子と子作りして嫁にするのが俺の夢だったんだ」

今のルーイの目には一人の異性にしか映らない。乳房とヴァギナで大いに感じ官能的に蕩けた姿は、ずっと夢見てきた理想の妻そのものだった。

現に彼女は抵抗もままならない様子。絶頂で力が抜けているのか全身を震わせるばかり。そんな乙女の蜜濡れた溝に、ルーイは狙いを定める。

「入れるよメル、今度こそ子作りしよう……!!！」

「やめろお、頼むからやめ——んああんっ!!！」

震える手を伸ばしたメルだが可愛い官能の鳴き声をあげた。添えられた亀頭が再び淫唇を擦ったのだ。

だがルーイにしても、意識してやったものではない。

「あ、あれ、入らないぞ。確かこうするんだっただけだ」

上手く入り口を捉えられずにツルリと滑ってしまっていた。経験の伴わない知識だけの生殖行為だったからだ。

少し焦ってもう一度亀頭を添えて押しこむ。が、やはり滑って淫唇をぬるりと引っかく。

「おかしいな、も、もうちよつと下か？ ん、んつと……!!」

「んああつ!! やめつ、やめてつ、こするのだめ、痺れる、あふうんつ!!」

童貞らしい挿入ミスが何度も続いて割れ目をこすった。

男からすれば、それは恥ずかしくて情けないもの。

だが運よく功を奏したのだろう。淫唇を擦られるたびにメルは可愛らしい悲鳴をあげた。

「あんつ! やめつ、んあつ、あふうん! だめえ、こする、なああツ……!!」

絶頂の余韻が残っているためか、今なお敏感になっているらしく擦れば擦るほど蜜が溢れてくる。腰が小刻みに跳ねあがって入り口粘膜がヒュクヒュクとわななく。

「メル、こんなんでも感じてくれるのか。ああ可愛い、エッチだ、素敵だ……!!」

内心焦っていたルーイだったが次第に自信を持ち始めた。ミスしても相手は感じてくれる、それが嬉しくて何としても成功させようと思う。熱い粘膜との触れあいも気持ちよく

気分は少しも萎えなかった。

やがて亀頭が手応えを感じ、膣の入り口をどうにか捉える。

「こ、ここか？ やった、入れるぞメルっ」

「ひい、よせ、やめろおおっ……！」

先端が入ったのを悟ったメルが、か弱げな声で訴えてくる。

「頼む、入れ……ないでくれえ……入れられたら俺、ほんとに女になってしまおう……」

力がすっかり抜けていながらも一線を超えることを頑なに拒否しようとする。超えればすべてが変わってしまうと本能的に悟っているみたいだ。

けれどルーイは、もはや自制することなど不可能だった。

「メル……怯えた顔も可愛い。惚れちまう、大好きになっちゃうっ……！」

「よ、よせ、顔を寄せるな——んっ、んんんっ……!!」

——ちゅっ、くちゅっ……

仰向けの肢体を抱くようにして、唇を重ねて強く吸う。

戸惑ったような彼女の声。恥じらいに揺れる赤い瞳を改めて素敵だと感じながら、少年は腰をぐっと押しこみ、

「んんっ、んんんんんッッ!!」

——ぶつつ、ずぶずぶずぶっ！

入り口近くにある濡れた甘い抵抗感、それを亀頭が突破して、サオまで一気に入りこむ。



第六章 スケベ勇者と変わりゆく魔王

勇者と魔王、二人の旅はそろそろ二十日あまりを過ぎようとしていた。旅は道連れ世は情けとはよく言ったもので、二人が協力しあえば旅路は滞りなく進んだ。そう、二人の関係は確実に旅の連れとなりつつある。勇者を見て魔王も少しずつ旅の知識を得ていったのだ。日常的な雑事程度なら自分でできるようになってきた。

特に船旅後は二人の距離感に変化が現れた。ツンとしつつも魔王は勇者を認めるようになったのだ。「なにもしないなら」という条件つきだが宿で同室を許すほどにまで。

しかし同時に悩んでいる様子でもあった。その契機もまたあの船旅だった。

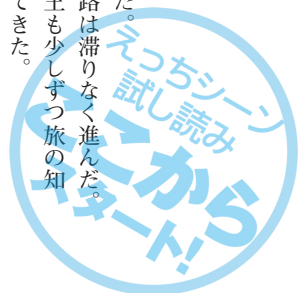
——あの無人島での夜、聖剣エスペラルは二人に語った。

『メルは今、身体だけでなく精神まで女に変化しつつあります。「わたし」などと言ったのもそれが原因に違いありません』

いわく、ルイーの理想（というか妄想）を体現しようとしたのがこの女体化だという。願いを力とする聖剣の能力がそうさせたのだそうだ。

そしてその効力は、身体だけでなく精神面にまで及んでいるという。

『今のあなたはルイー好みの理想の女。感じやすいのも恐らくそのため。身体の相性も抜群のようですし、抱かれるごとに意識まで女化しつつあるのでしょう』



それを聞いてメルは焦った。「俺の中から今すぐ出ていけ！」と罵倒までした。だが続く聖剣の言葉に妙にうろたえてもいた。

『いいのですか。今の関係が消失してしまいますよ。空虚な心が満たされることもなく』

「な——なに、いつてるんだ……」

『隠しても無駄です。伝わるのです。あなたの心の奥底には力だけで物事を制してきたがゆえの、虚しさと孤独があることを』

メルはなぜか押し黙った。自分でも気づかなかった急所を刺されたような様子だった。

——それ以後、彼女は時折考えこむようになった。

(やっぱショックだったのかな。全部女の子になつてくなくていわれて)

安宿の狭い一室でルーイはベッドに寝転ぶ。隣の部屋にいるメルのことには思いを馳せる。そもそもこの旅の目的は彼女が男に戻ることに。知らぬ間には言え、そこから遠ざかっていたとなれば、焦りもするし動揺もあるだろう。

彼女にどんな言葉をかければいいのか、正直いつて分からない。胸に抱える空虚とやらも押し量ってやることができず、密かに心苦しく思っている。

それでも、はつきり分かることもある。自分の中にある彼女への気持ちだ。

「よし！ こうなったらあの手でいくか」

持ち前のポジティブさを発揮し、ルーイはすぐに行動を開始した。

*

(ん、んん……あれ、ここは……)

身体に奇妙な熱を感じて、メルはうつすらと目を開いた。

(ここは……ベッドの上？ そうか、ルーイと一緒に宿に泊まって……)

思い出す。今日は人目につかぬよう裏路地の寂れた宿をとった。「なにもしない」と彼は言ったが、なんとなく気分が沈んでいて、別々の部屋で寝ることにしたのだ。

が、すぐに気づく。今いる部屋は小さなものではなく王族貴族が使いそうな広い寝室。ベッドも天幕つきの豪華で大きなものだった。

「な、なんでこんなところに？ わたし一体……って、やだ、なにこの格好っ!？」

驚いたことに衣装まで別物になっていた。否、それは服ではなくランジェリー。黒を基調とした胸元ピンクのコールセットタイプの下着だった。

もちろん見覚えなどあるうはずがない。買った記憶も着た記憶もない。

だがメルは、女性らしい下着であることに何よりも先に驚いていた。

「どうしてこんな格好……は、恥ずかしいっ……」

胸のカップは派手に膨らみアンダーの締めつけが豊満さをより強調する。ウエストラインも細く絞られヒップの豊かさも際立っている。胸元と裾にはフリルがあつてデザインのにもお洒落で華やかだった。

下半身にはショーツが別にあり、やはりピンクでフリルがある。黒のストッキングとガーターベルトが、なんだか妙に艶かしい。

一体どうしてこんなものを——そう思った矢先に、突然何者かに押し倒された。

「る、ルーイ!! お前、なにを……」

いつの間に現れたのか、旅の連れがベッドにあがりこんでいた。

その彼が、妙に優しく微笑みながら唇を寄せてくる。

「メル、素敵だよ。すぐく似合ってる……今夜もいっぱい作りしよう」

「ば、馬鹿やろう、急になんて、だめ——んっ……」

ゆっくりと、唇を奪われる。

なぜだろう。たったそれだけで頭がぼーっとし、全身の力が抜けてしまった。

(キス……気持ちいい。ルーイとのキス、幸せ……)

自分の中で言葉に出すくらい、はつきりそう感じてしまう。

キスされたまま仰向けに寝かされ、今度はゆっくり胸と腰に触れられる。

荒々しくなく、けれどたどたどしくもない、丁寧にまさぐる優しい愛撫。

下着越しのその刺激に、メルは甘ったるい声を漏らした。

「はああ……だめ、胸……お尻……感じてきちゃう……」

自分でも初めて耳にするくらい可憐で悩ましい声だった。無意識に本音が漏れたような、不思議に恥ずかしい音色だった。

(どうなってるんだ、声まで本物の女みたいに……ああっ、でも気持ちいい、乳首、立ってきちゃう……)

下着越しでも尖ってくるのが目に見えるかのようだった。優しく揉みこまれ搾られるうちに乳房の先端がどんどん硬くなり、自ら進んで官能を拾い集めるようになっていく。

肩からストラップが外されていっても、なぜだか何一つ抵抗できない。羞恥と興奮と甘い期待感が身体を縛りつけているみたいだ。

フリルつきのカップが下げられると、白く豊満な女の果実がぷるんっ、と揺れ出て彼の視線を誘惑する。

「綺麗だよメル、素敵なおっぱい。ほんとに食べちゃいたいくらいだ」

彼の言葉にメルは小さく首を振る。こみあげる羞恥と甘い欲が先端をさらにしこらせる。

「はああ、ルーイ、口、寄せてえ……あつ、ああああん……！」

彼の唇が先端を捉えると、すぐに官能の鳴き声が漏れた。

（だめ、感じるう、乳首吸われてる、おっぱい食べられちゃってるうっ！）

両手でしつこく揉みしだきながら彼は乳肉に軽く歯を立てる。かすかな痛みに官能が混じって甘い痺れが芯に響く。

繰り返される胸への愉悦に、メルは吐息を熱く湿らせていった。

「はあ、はあ、だめルーイい、わたし……ほしく、なるう……ルーイの、ルーイのお……」（なにいつてるんだ、自分からおねだり、するなんて……！）

動揺が身体をさらに熱くする。信じられない。自分から男を、彼を求めるなんて。だが口にしてしまうと分かる。この快楽に流されたい自分がある。彼に満たしてもらい

たい自分がいる。

そう。聖剣が語った言葉は嘘ではなかった。メルは心に空虚を抱えていた。

魔王は基本血筋で決まる。魔族の遺伝能力は高く、強者からは強者が、弱者からは弱者が生まれる。メルは魔王の血筋に生まれ生誕と同時に魔王となることを約束されていた。

だからこそ幼少時から孤独はあった。強者として弱者を従える。魔族の頂点に立ち魔物らを使役する。それは一見楽しく思えるが、誰とも腹を割って話せず弱みを見せることも許されず、正面からぶつかりあえる相手にすら恵まれないということだった。

そんな己に内心虚しさを覚えていたからこそ、勇者の存在に胸が躍った。こいつになら全力でぶつかれる。対等に渡りあえる。その事実を高揚し戦闘時には充実感すら味わった。
(初めはそれだけでよかった。本気で戦えるだけで満足だった。なのに今じゃ……)

共に旅した二十日あまりがなぜか貴重なものに思える。対等に渡りあえる男と一緒に寝起きし、いろいろなことを話した。時に助けられ時に助けた。手駒以外の同胞というものを初めて手にした気分だった。

その彼に、恥も外聞もなくまっ直ぐ言い寄られ身体まで重ねていくうちに、メルはより深い繋がりというものを意識するようになっていた。

「ほしい、のお……ルーイのチンポ、おま○こにほしい……」

その意識が今、不思議な形で表れていた。一緒にいたい、繋がってほしい、これまでの孤独を忘れるくらい彼の存在で満たされたい、そんな欲求が堰を切ったように溢れてきた。

(あり得ない、くそお、きつと聖剣のせいだ。心まで無理やり女にされて……)

そうは思うも、まるで理性が溶けていくみたいに反抗心が湧いてこない。切なさだけが胸に溜まって自ら開脚し腰を浮かせる。

「メルがおねだりしてくれるなんて。嬉しいよ」

まるで時間が飛んだかのようにルイーは一瞬で全裸に変わった。

「脱がすよメル。俺のチンポ、可愛いメルの可愛いおま〇こに入りたい」

両手が伸びてきてショーツがするすると脱がされる。ガーターベルトがあるというのに驚くくらい淀みなく。

自覚できるほど濡れそぼったヒュクヒュクとわななく膣の孔口に、雄々しくそり返る彼の肉棒がゆつくりと押しこまれていく。

「あんっ、あはあッ！　くるう、チンポおッ！　素敵、やん感じちやうッ！」

膣内に刺激を覚えた途端にメルははしたなく嬌声をあげた。

(気持ちいい、おま〇こ感じるう！　熱くてじんじんして、ああ入り口溶けちやうッ！)

不思議に奥への刺激は弱いが、それでも十分感じてよかった。熱い牡肉が粘膜をこする甘美感に、早くも下腹部の神経が蕩け、心地よさげに腰がくねる。

「あんっ、あんっ、もつとお、もつと突いてえっ、ルイー、ルイーいッ……！」

募った疼きは想像以上に大きくて根深く、刺激をもらっては次を欲しがらる底なしのような貪欲さがある。もつと深くまで彼を啜えこみ疼く膣肉を掻き回されたい、そんな欲望が

とめどなく湧いてくる。

それに応えるかのごとく激しく腰を振る彼の姿が、愛欲に燃えた乙女心にさらなる燃料を投下してくる。

「メル、メルっ、俺の可愛いメル……好きだよ、大好きだよ」

「はあっはあっ、る、ルーイいいッ……！」

「結婚しよう。子供を作ろう。三人ですつと一緒に暮らそう」

——どきどきどきどき……！

急激に心臓が早鐘を打ち始めた。

求婚を口にした彼の表情、それは思いがけず真剣で凛々しいものだった。

その言葉の意味を口の中で反芻するうちに、メルは何がなんだか分からなくなってきた。（どうしよう、こいつ本気だ、本気で結婚を……なんで、なんでこんなに胸、熱くう……！）

それが悦びの感情であることを、メルは必死に否定しようとした。

だが無理だった。彼の腰が再び動きだし膣肉を熱く擦りこんできたからだ。

「あんっあんっだめえおま○こおッ！ こすっちゃだめ、動いちゃだめっ、感じちゃう、わたしイっちゃうッ！」

求婚の言葉がそうさせたのか身体感覚がまた一つ鋭敏になっていた。入り口を割られる粘膜を擦られる。這い回るように刺激される。ざらざらとした不思議な感覚が性感帯を熱く甘く蕩けさせる。

「あんあんッ、だめえキチャウ、気持ちいいッ、子作り好きになっちゃウッ！」

喘ぎながら首を振るも、官能はみるみる理性を溶かし下腹に甘強い熱を溜めてくる。腔肉が火照つて子宮が疼き、自ら快楽を貪ろうと腰が勝手に動き出す。

気づけば自分から乳房を揉みしだき大開脚して彼を受け入れていた。

「はあッああんッ、だめえ、中でいっばいねらせないでえッ！もおいつちゃウ、我慢できない、ルーイ、ルーイッ！」

「いいんだメル、イつてくれ！気持ちよくなつて妊娠してくれ！」

彼は吠えて豪快に肉棒で突いてくる。グラインドをつけて鋭く、強く。あらわになった尻肉が弾け溢れる愛蜜が次々と飛び、衝撃を受け止める柔な腰が嬉しそうにクナクナ踊る。駆け抜ける快電流も鋭さを増し、下腹部全体が愉悦一色となる。大陰唇が小刻みに震え小陰唇がきゅうつと窄まり肉サオに吸いつく。

（だめえ、ほしくなっちゃウ！ 精液、ルーイの熱い赤ちゃんのもとおッ……！）

絶頂が見えて理性が脇に退き、そんな欲求まで湧いてきてしまう。

そこへぬるりとした刺激が来て、メルは大きく腰を跳ねさせた。

「あはあッあああイクウウウウッ！」

——びくっびくっびくっびくっ！

とうとう官能の頂に達してメルは歓喜に打ち震えた。射精とも深部への刺激とも違う、中腹部分への摩擦感。しかしそれでも火照った神経には十分な引き金となっていた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

魔界転生
ラブコメディ

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

フリーダム120%!?
ジャンルとかわれない
ドキドキラブ!

呪詛嬢の師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説シリーズ!

女刑事美優

美優は自慢の肉体で

リアルドリーム文庫



あなたはどのタイプ?

二次元ぷち文庫



あの人気作品の
外伝作品もあっ!!
電子書籍しか読めないチチノベル

姫騎士 クラスメイト!

ビギニングノベルズ



小説家になろうの男性向けサイト
から書籍化!!



異世界で
手に入る
宝珠

ドキドキラブな
ハーレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫